

第9章 社会連携・社会貢献

(1) 現状説明

点検・評価項目①：大学の教育研究成果を適切に社会に還元するための社会連携・社会貢献に関する方針を明示しているか。

評価の視点1：大学の理念・目的、各学部・研究科の目的等を踏まえた社会貢献・社会連携に関する方針の適切な明示

社会貢献・社会連携に関する方針について、「本学の理念及び目的の実現に向けて、大学が有する知的・人的財産を活用することにより、教育研究活動の活性化とその成果を地域社会に還元し、文化及び地域社会の発展に貢献する」と定めている（資料9-1【ウェブ】）。なお、社会貢献・社会連携に関する方針については、教職員向け学内グループウェアシステムの掲示板にて明示し共有している（資料6-3）。

点検・評価項目②：社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、実施しているか。また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか。

評価の視点1：学外組織との適切な連携体制
評価の視点2：社会連携・社会貢献に関する活動による教育研究活動の推進
評価の視点3：地域交流、国際交流事業への参加

理念・目的に基づいた社会連携・社会貢献に関する取り組みについては、以下のとおりである。

学外組織との連携体制として、2018年7月19日に兵庫県姫路市との連携関係を一層強化・発展させるため「相互の人的・知的資源を活かした連携協力に関する包括協定」を締結した。今後、包括的な連携のもと、教育・文化、健康・福祉、まちづくり等の分野において相互に協力し、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的として連携を図っていくこととしている。締結事項は、(1)医療分野における担い手の育成、(2)保育及び教育分野における担い手の育成、(3)社会教育・文化・スポーツの振興・発展、(4)人材育成、(5)健康・福祉の向上、(6)国際交流、(7)まちづくり、(8)その他両者が協議して必要と認める事項としている（資料9-2）。

社会連携・社会貢献に関する活動による教育研究活動の推進として、姫路市内の四大学が、姫路市との共催で各大学を会場に開催している公開講座「姫路市シニアオープンカレッジ」は、本学看護学部と教育学部、看護学研究科の教員が講師を担当し、開学以降、様々なテーマのもと開催している。毎年度、各5回講座を開催しており、近年では、2017年度には看護学部と看護学研究科の教員による「幸せに生きるための秘訣」、2018年度には教育学部教員による「豊かなくらしをつくる」、2019年度には看護学部教員による「子どもたちと共に

こころ豊かな暮らし」を開催した。公開講座の終了後には、参加者を対象とした講座評価アンケートを実施しているが、参加者からは概ね良い評価を得ており、継続を希望する意見が多い（資料 9-3）。

2019 年度、受験実績の多い近隣の公立高校（兵庫県立香寺高等学校）との高大連携を締結し、高校と大学との教育交流を促進し教育の質向上を図っている（資料 4-4）。

本学大学祭（のじぎく祭）開催時には、大学コンソーシアムひょうご神戸の地域交流委員会からの呼びかけに応じ、こどもを対象にした「キッズオープンキャンパス」を実施している。2019 年度 10 月 26 日、27 日に開催したのじぎく祭では、看護学部教員と教育学部教員が連携して企画を行い、両学部学生の協力を得て開催し、延べ約 600 名の参加があった（資料 9-4）。

姫路市では、市の政策に示唆を与える研究活動に対する助成事業「姫路市大学発まちづくり研究助成事業」を行っており、市内にある大学の持つ知的資源や学生の力を街づくりに生かすとともに、官学連携のまちづくりを推進している。2017 年度には「地域力を育てるー地域の求心力を高める地域の食卓ー」、「安全安楽な救急搬送を目指して」、「重度障害者の QOL を豊かにする環境とまちづくりについての研究ースヌーズレンルームの開設と市民への開放を中心にー」、2018 年度には「安全安楽な救急搬送を目指して Part2～メインストレッチャー乗車者の身体の揺れを低減するために～」、2019 年度には「姫路城と姫路駅周辺のトイレに関する研究」「安全安楽な救急搬送を目指して Part3～姫路市発！安全・安楽・安心な救急車両用枕の開発～」の研究テーマで継続的に採択されている。研究終了後は、姫路市長、姫路市内の学長、一般市民が参加する研究活動の成果発表会を行い、姫路市の市政に寄与している（資料 9-5）。

教育学部では、2008 年度より教員免許状更新講習を実施し、必修講習、選択必修講習、選択講習を実施している（資料 9-6）。他の社会貢献活動については、2008 年度より毎年、「大学キャンパスで親子のふれあい」をテーマに、「親子で運動遊び」を中心に「キャンパスの自然遊び」などを盛り込み、年に 10 回、開催している。2018 年度は 1 回で約 30 人（親子合計の人数）、年間で延べ 300 人の参加者があった（資料 9-7）。

教育研究の成果を基にした社会貢献活動として、人文学・教育研究所主催の講演会（源氏物語を読む会など）の実施、医療従事者、教育関係者への図書館の閲覧・複写利用の提供を行っている。公開講座は、地域の方々に生涯学習の場を提供することで地域に貢献し、大学が地域に根ざして発展することをねらいとして、2009 年度より開催しており、参加者からの好評を得て、継続して開催している（資料 9-8）。講座の開講日には、参加者に図書館の閲覧利用を提供している。医療従事者、教育関係者に対する図書館での閲覧・複写利用の提供は、申し出があった場合に受け付けており、段階的ではあるが、現時点で可能な範囲で学外者への図書館利用を提供している。また、学術雑誌『翰苑』の頒布や、地域住民対象の無料の学術講座の開催といった活動により、社会連携・社会貢献の一助となっている。学術雑誌『翰苑』を、一般書店で販売することで、社会に広く本研究所の研究活動の成果を還元す

ることに努めている（資料 8-26）。2013 年度に創刊号（2014 年 3 月発行）を刊行したことを皮切りに、第 2 号（2014 年 11 月）、第 3 号（2015 年 3 月）、第 4 号（2015 年 10 月）、第 5 号（2016 年 3 月）を刊行し、社会に対して研究員の研究成果を広く公開している。

兵庫県ならびに姫路市等の後援や共催により、一般市民を対象に各種公開講座や講演会を開催している。子どもから高齢者までの様々な年齢層を対象に、興味関心が高いテーマを掲げて毎年継続的に実施し、教育研究の成果を還元する貴重な機会としているとともに、地域住民との貴重な交流の場にもなっている。2019 年度には、市民公開講座を開催している。書家の金澤泰子先生、翔子先生を本学に招き、「天使がこの世に降り立てばーダウン症者の書家 翔子と歩んできた道ー」の題目で実演と講演を実施し、参加者から「大変感動しました」、「生きる勇気をいただきました」などの感想があった（資料 9-9）。

看護学部では、兵庫県看護協会との連携により、本学教員による講演活動及び各種委員会の委員委嘱を受けるなど、兵庫県の看護師の質向上に寄与している。また、実習施設および病院看護部の依頼により研究指導等を行い、看護師の質向上に貢献している。国際貢献活動として、独立行政法人国際協力機構（JICA）などからの要請時には、JICA 国際緊急援助隊医療チームの一員として積極的に参加するなど、人材の提供を行っている（資料 9-10）。さらに、国際化の視点から、ビクトリア大学と学術交流協定（MOU）を締結し、留学生の派遣・受入れの整備を進めており、2020 年度から本格的に実施していく予定である（資料 3-6）。

2019 年 11 月に、健康・教育実践研究センターが設立され、来賓及び地域の老人クラブの方々の参加のもとに開所式が行われ、姫路市長による「震災復興と個別化医療」の記念講演が行われた（資料 9-11）。また、本学教員による「体験・笑いヨガ」が行われ、地域の方々の参加による健康・教育実践研究センターの初めての行事がスタートした。本センターの特色の一つは、乳幼児からシニアまでの幅広い世代の方々に対して、専門家が相談に応じたり支援プログラムの実践を行うことにある。健康・教育実践研究センターの組織は、「子ども発達支援部門」、「地域生活支援部門」、「障害児・者支援部門」、「シニア支援部門」に分かれている。それぞれの役割は下記のとおりである（資料 9-12）。

子ども発達支援部門では、子どもたちを取り巻く社会の状況、地域環境・教育環境は厳しさを増しているため、子どもと家族に生じている課題に対して、相談や助言を行うとともに、親子遊びなどのプログラムを通して、地域における子育て支援や教育支援を行っている。地域生活支援部門では、兵庫県看護協会と協同して「まちの保健室」を開設し、健康相談、子育て相談、介護相談に加えて、健康に役立つ情報提供や、様々な機器を用いての健康チェックを行い、学校の保健室のように地域の方々が気軽に相談できる場になるよう計画している。障害児・者支援部門では、障害児・者の発達を支援し、社会参加を進めていくことは、現代的課題である共生社会の実現にとっても大切であるため、本人や家族の相談や支援プログラムを通して、障害のある人々や家族が住みやすい環境を作っていくことを目指している。シニア支援部門では、シニアの方々がいきいきと生活できる社会を作っていくことを

使命として、地域に住む人々の相談や助言、笑いヨガなど地域の人々が参加できるプログラムを通して支援を行っている（資料 9-13）。

また、健康・教育実践研究センター、看護学部と教育学部、看護学研究科が各々特徴を生かしながら、学生の参加のもと、子どもから高齢者までの発達の支援や健康の維持促進、また慢性疾患や障害児・者の QOL の向上を目指した支援や研究を行っている。特徴として、1) 相談活動、2) プログラムや講座等、3) 地域の人々や行政等との共同研究、4) 研究成果の社会への公開、などを行っている。1) では、子育て相談・教育相談・発達や障害の相談・保健相談・高齢者相談などを通して、地域における専門的機能を持つ機関としての役割を担っていく。2) では、子どもからシニアまでの活動プログラムの実践や公開講座等による啓発活動を通して、地域の人々の生活を豊かにしていく。3) では、医療や教育機関との連携により、地域の人々の協力を得て、医療や福祉用具・教育関連プログラムなどの開発を行っている。4) では、研究センターの成果は報告書としてまとめるとともに、姫路大学ブックレット（小冊子）の作成・出版、姫路大学健康教育研究会などの設立などを通して、広く社会へ発信していく。健康・教育実践研究センターは開設間もないため、大学ホームページに研究センターの紹介や内容のページを作成し、地域の人々に分かりやすいように周知し、地域の人々と歩んでいけるようなセンターを目指している。

地域交流・国際交流事業への積極的参加については、2009 年度より、中学生の社会体験活動事業の「トライ・やるウィーク」に協力し、年に 1 回、1 週間、中学生 2 名を受け入れ、主に図書館での職業体験を提供している（資料 9-14）。各学部での地域交流については、「教育目的は、人に愛され、信頼され、尊敬される人を育成することにある」という建学の精神に基づき、看護学部は「地域の伝統や文化を生かす『知』の創造・蓄積を図り、地域と共生する地域連携」を目的とした「姫路大学看護学部地域貢献活動委員会規則（資料 2-24）」を定め、地域貢献活動委員会を中心に進めている。2016 年には、看護学部の地域貢献活動委員会活動の一環として、「HIV/AIDS—命の大切さの再発見—」をテーマに、ユニセフのつどいで学生によるワークショップを開催した（資料 9-15）。国際交流事業への参加については、国際化の推進を目的とした「姫路大学国際連携推進委員会規程（資料 2-25）」を定め、国際連携推進委員会を中心に進めている。同委員会では年度ごとに活動方針を策定し、教授会において報告し、共通理解を図っている。

その他の活動として、2019 年 5 月には、大きな縁（塩）のまちづくり実行委員会によるイベント、「大きな縁（塩）のまちづくり～海の恵みで縁づくり～」を本学において開催している。本イベントは、姫路市コミュニティ活動助成事業として採択され、約 200 名の子どもから大人までの参加があった（資料 9-16【ウェブ】）。2019 年 9 月には、看護学部の地域貢献委員会のメンバーらが、大塩地区で行われているなかよしサロン（地域の方は毎月約 100 名程参加）にボランティアとして参加し、学生 11 名、教員 6 名が地域の方と交流した（資料 9-17）。

点検・評価項目③：社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点1：適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価

評価の視点2：点検・評価結果に基づく改善・向上

社会連携・社会貢献の一環として本学で開催される大学祭などの行事の中で、様々な取り組みを行い、地域との交流を深めている。さらに、それぞれの行事の終了時には、アンケートを行い、改善点や要望を聞き、次回に向けて各種委員会や各部署で検討を行っている。各種委員会による具体的な点検・評価を教授会で報告し、教授会での審議結果を踏まえ、次回の実施計画を各種委員会が策定し、改善・向上に向けた取り組みを実施している。

現在、各学部・研究科等の各部局において計画の策定、実施及び検証を行っているが、今後は、教育改善・内部質保証会議が全学的に、PDCA サイクルの検証を進めていくよう努める。

健康・教育実践研究のセンターの開所にあたっては、地域の幼児や「親子で運動遊び」参加者の保護者、老人クラブの高齢者、障害児の保護者などを対象に、相談や講座の希望について調査を行った。その結果、幼児の保護者は「食事や栄養に関して」「発達障害」「ゲームの時間」「子どものほめ方・叱り方」など、シニア世代からは、「ふれあいサロン」「運動や口腔機能のチェック」「心の健康」など、障害児の保護者からは「成人期・高齢期を迎える障害児」「障害児の性教育」「ペアレントトレーニング（PT）」「ソーシャルスキルトレーニング（SST）」などの希望が見られた。この調査結果を受け、2020年度は、看護協会と連携した「まちの保健室」の開設、公開講座など、地域の人々と連携協議しながら、地域の人々の生活の質を高めるような、プログラムを行っていく予定である。

（2）長所・特色

- ・姫路市との共催で開催しているシニアオープンカレッジや人文学・教育研究所主催の学術講座に、地域住民の受講者が多数参加しており、地域に密着した社会貢献活動となっている。
- ・健康・教育実践研究センターを開所したことにより、地域の乳幼児からシニアまでの幅広い世代の方々に対して、専門家による保育や教育に関する相談、地域生活における健康相談、発達や障害に関する相談、高齢者の生活や健康に関する相談等、各種支援プログラムの実践を行い、教育研究活動の成果を社会に還元している。

（3）問題点

- ・社会貢献・社会連携に関する方針については、2019年3月に教育改善・内部質保証会議において定めたため、2020年度から全学的な共通認識の下での計画の策定、実施及び検証を行っていく。

(4) 全体のまとめ

本学の理念・目的に基づき、教育研究活動の活性化とその成果の還元を目的とした社会貢献・社会連携に関する方針を定めている。この方針に基づいて、姫路市との「相互の人的・知的資源を活かした連携協力に関する包括協定」の締結、姫路市との共催による公開講座、本学独自の研究センターによる公開講座を推進し、地域住民を対象とした社会連携・社会貢献活動を継続して今後も取り組んでいく。各学部、研究科、健康・教育実践研究センターとしての特色を生かした内容を盛り込んだ講座等の開催は、社会貢献のみならず、本学の教育研究活動を伸長させる貴重な機会となっている。各学部・研究科等の各部局における計画の策定、実施及び検証をさらに発展させるべく、教育改善・内部質保証会議が全学的に、PDCAサイクルの検証を進めていくよう努める。